

02	一宮	富士小学校	カ ト ウ マ キ コ
			名前 加 藤 真 希 子
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目

「自分の思いや考えを伝え合う楽しさ」を実感できる授業をめざして
 ー自分の思いや考えをもち、伝え合い、受け止める学習活動を通してー

研究要項

1 主題設定の理由

児童が社会の中で生き生きと生活していくためには、自分の思いをもち、それを適切に伝えたり、他者の思いを受け止めたりしながら、共通の目標に向かって協力していく力が重要であると考え。

しかし、支援学級に在籍する児童の中には、相手の思いを考えずに一方的に自分の思いを伝えてしまう児童や、自分の思いを分かりやすく表現できない児童、そもそも自分の思いをもつこと自体が難しい児童も多く見られる。その結果、互いの思いがうまく伝わらず、児童間での行き違いや誤解が生じたり、協力がうまくいかなかったりすることが起こる。また、他者から認められない経験を通じて自己肯定感が低下することもある。

そこで、本研究では、児童が「自分の思いや考えをもち、伝え合い、受け止める」学習活動を通じて、言語による関わり楽しさを実感できる授業づくりを目指していきたい。これは、児童の表現力の育成とともに、他者との関係を築く力を育むことにもつながると考える。

小学校学習指導要領解説(国語編)、特別支援学校学習指導要領解説(国語科)ともに、目標が、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で理解し表現する資質・能力を育成する。」とされており、言葉を通して理解したり表現したりする力を身に付けることが重視されている。

児童が自分の考えをもち、それを相手に分かりやすく伝え、さらに他者の考えを受け止めながら話し合うことができれば、より豊かで生き生きとした生活を送ることができると考え、本実践を設定した。

2 研究の仮説と検証方法

(1) 目指す児童像

自分の思いや考えをもち、言葉で伝えることができる子 他者の思いや考えを受け止め、話し合うことの楽しさを実感できる子
--

(2) 研究の仮説

【仮説1】

自分の思いや考えを伝えたり、聞いたりする活動を継続的に設定し、思いや考えを引き出すための教材や教具を工夫すれば、自分の思いや考えをもち、伝えようとするであろう。

【仮説2】

活動の中で話し方や聞き方の支援を工夫すれば、他者の思いや考えを受け止め、話し合うことの楽しさを実感できるであろう。

(3) 研究の手だて

① 仮説1の手だて

ア 継続的な場の設定

- (ア) 国語科の該当単元(資料1)において、自分の思いや考えを伝えたり、聞いたりする活動を継続的に設定する。

イ 思いを引き出すための教材・教具の工夫

- (ア) 教材の挿絵や、本・実物を用いた学習を取り入れ、視覚的な情報から児童が思いを持ちやすいようにする。
- (イ) 「選択シート」を活用し、提示された3つの選択肢と「どれでもない」を加えた4つの選択肢の中から、自分の思いを主体的に選ぶことができるようにする。
- (ウ) 「ことばのたからばこ」を提示し、気持ちを表す言葉を選択できるようにする。

「みんなにしらせよう」1年教材(9月実施)
「秋がいっぱい」「秋のくらし」2・3年教材(10月実施)
「おすすめの一さつを決めよう」3年教材(11月実施)
「冬がいっぱい」「冬のくらし」2・3年教材(12月実施)
「くわしく きこう」1年教材(1月実施)
「いいこといっぱい」1年生1年教材(3月実施)

【資料1】国語科実践単元

② 仮説2の手だて

ア 話し方や聞き方の支援

- (ア) 「話し方名人あいいうえお」「聞き方名人あいいうえお」を黒板に提示し、好ましい話し合いの仕方を毎時間確認する。
- (イ) 「ふわふわあいづち」を提示したり、相づちの言葉が書かれ、友達の話が終わった後に掲示する「ふわふわ相づちスティック」を活用したりする。

(4) 検証方法

ア 対象学級および児童の実態

本学級(自閉・情緒学級)には、5年生1名(A児)、3年生2名(B児・C児)、2年生1名(D児)、1年生3名(E児・F児・G児)の計7名の児童が在籍している。児童は自閉スペクトラム症やADHD等の特性を有し、自分の思いや考えを言語化することの苦手さや、他者への反応の乏しさといった共通の課題をもつ。

イ 抽出児童(C児)の実態と目指す姿

本研究では、そのうち3年生児童1名を抽出児童Cとして、ワークシートの記述、振り返りカード、および授業観察記録をもとにその変容を考察する。

抽出児童Cの主な実態は、自分の思いや考えを言葉で表現することや、他者からの働きかけに対して応答することに強い抵抗感や難しさを抱えている点である。本実践を通して、視覚支援や選択肢等を活用しながら言葉や指さしで思いを伝えること、および相づちスティックを用いて他者に応じる姿勢の定着を目指した。

3 研究の実際と考察

(1) 国語科「みんなにしらせよう」(1年教材/令和7年9月実施)

本授業では、夏休みという共通の体験から題材が見つけやすくなると考え、「夏休みの思い出」の発表活動を設定した。また、互いの話に関心をもって聞くことができると考えた。児童はそれぞれ夏休みにしたことを二文程度で発表した。発表に対して疑問に思った点を積極的に質問する姿が見られ、質問をきっかけに発表者がより詳しく話す場面が多く見られた。例えば、E児が家族と滝を見に行った思い

出を話した際、D児が「滝は遠い場所ですか」と問いかけた。これに対しE児は「トンネルをくぐって、高速道路に乗って行った」と具体的に説明し、体験を豊かに語ることができた。

一方で、C児は自分の順番が来ても首を振り、話すことができなかった。担任や周囲の児童が質問をしたが答える様子は見られず、伝えられずに終わった。他者の発表に対する反応も乏しかったため「相づちスティック」(資料2)を渡した。はじめは机の中にしまう様子が見られたが、他児童が楽しそうに活用する姿に触発され自ら手に取るようになった。C児は毎回「へえ～そうなんだ」のスティックを選んで提示し、自分の気持ちを表すことができた。相づちスティックにより反応を引き出せたが、思いをもつ段階での丁寧な工夫が必要であると考えた。



【資料2】相づちスティック

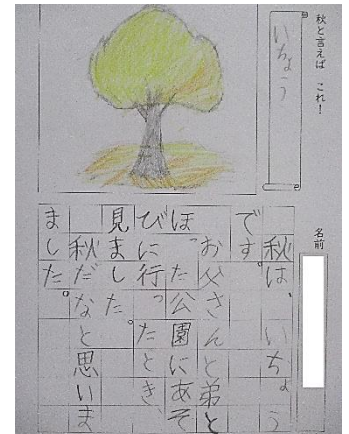
(2) 国語科「秋がいっぱい」「秋のくらし」(2年・3年教材/10月実施)

本教材は、挿し絵を手がかりに自分の思いをもち、伝え合う楽しさや相づちや質問を通して思いを受け止めてもらうことの楽しさを味わわせることをねらいとした。

① 思いをもつ段階の実践(第1時)

挿し絵を見ながら絵と言葉を対応させて音読した。「夜長」等の難しい語の説明を加え、理解を深めた。その後、児童から「さつまいも」「りんご」「かき」などの生活経験に基づく意見や、「夜が長い」「月」「紅葉」など挿し絵に基づく意見が出された。

次に、意見の中から一つを選び「秋と言えばこれ!カード」に絵と文で表した。D児は「夜長」の挿し絵からデイサービスの帰り道の暗さを書き、E児とG児は「月夜」の絵から体験を表現した。C児は好きな植物である「いちよう」を選んで絵を描き出したが、文を書く段階で手が止まった。(資料3)そのため、「選択シート」(資料4)を使用した。担任が提示した選択肢から「2」を指差し、「公園に行ったときに見た」と答え、父と弟と公園に行った体験を書くことができた。



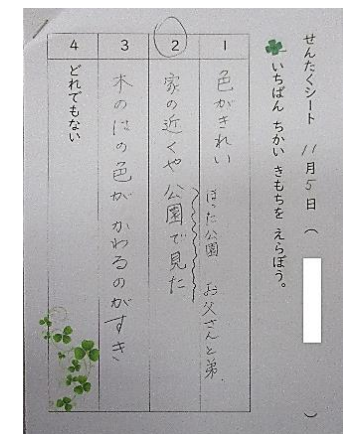
【資料3】C児のワークシート

② 思いを伝える段階の実践(第2時)

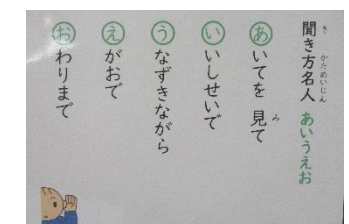
4人グループでカードを読み合い思いを伝え合った。聞き手が思いを受け止められるように、また話し手が受け止めてもらえていることを実感できるように、「話し方・聞き方名人あいうえお」(資料5)を確認し、全児童に「相づちスティック」を使用させた。児童は「せーの」でスティックを出し、「〇〇くんは『なるほど』かあ」と嬉しそうに応じる姿が見られた。

C児は言葉での発表は難しかったものの、自分の書いたカードを相手に向けて示すことができた。また、他児童の発表には「相づちスティック」の「へえ～そうなんだ」を選んで応える姿が見られた。

聞き手の反応が形として見えることで、話し手は受け止められている実感をもち、思いを伝えることに対して安心感を与えることができたと考えられる。



【資料4】せんたくシート



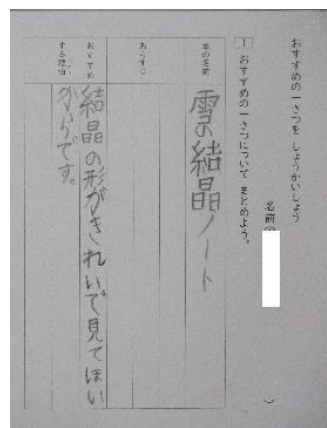
【資料5】聞き方名人あいうえお

(3) 国語科「おすすめの一さつを決めよう」(3年教材/11月実施)

本という具体物で意見を引き出し、1年生に紹介する「おすすめの一冊」を選び、その理由を伝え合う活動を通して、互いの提案に相づちや質問で思いを受け止め合うことをねらいとした。

① 思いをもつ段階の実践(第1時)

用意した本は、1年生が興味をもちやすい内容に加え、C児が関心を示している事柄の本も準備し、C児が選びやすいようにした。その結果、A児は『歯』、B児・C児は『雪の結晶ノート』、D児は『しゅっぱつしんこう』を選び、C児も迷うことなく本を決めることができた。ワークシートの理由記入で、A・B・D児は「なぞが解けておもしろい」「結晶の作り方を教えたい」など自分の思いを書くことができた。一方、C児は自力で書くことが難しかったため、「選択シート」の選択肢を調整して提示した結果、②を選ぶことができ、自分の思いをワークシート(資料6)に表すことができた。



【資料6】C児ワークシート

② 思いを伝える段階の実践(第2時)

ワークシートをもとに自分がその本を選んだ理由を伝え合い、1年生にすすめたい本を一冊に絞る話し合いを行った。全児童に「相づちスティック」を使用させた。A・B・D児は順序立てて発表した。C児は自分でワークシートを提示し、担任が代読する形で思いを伝えた。発表後、他児からスティックを示されると嬉しそうな表情を見せた。また普段他児に批判的になりがちだったA児・B児も「なるほど」のスティックを選び、共感を示す姿が見られた。

これらのことから、相づちスティックを使用することで、児童が自分の思いを伝えやすくなり、また思いが受け止められる心地よさを実感できたと考える。

(4) 国語科「冬がいっぱい」「冬の暮らし」(2年・3年教材/12月実施)

本教材は、見通しをもたせ、伝え合う楽しさや思いを受け止めてもらうことをねらいとした。

① 思いをもつ段階の実践(第1時)

挿し絵を見ながら意見を出し合った。挿し絵にあった「雪」をもとに、「積もった雪」「雪の結晶」「雪だるま」「おばあちゃんの家のみかん」の意見が出た。C児は挿し絵を指さしながら「これかな」とつぶやき、「ひいらぎ」を選んだ。見たり聞いたりした経験の有無を尋ねると首を振り、体験に基づく選択ではなく、大好きな植物であることが理由である様子がうかがえた。「書きたい」という思いを尊重し、ひいらぎがどのように使われているのかをインターネットで一緒に調べた。すると、インターネットの画像からクリスマスケーキの飾りとして見たことを思い出し、カードに書くことができた。C児にとって挿し絵や画像は思いをもつ有効な手段となった。

② 思いを伝える段階の実践(第2時)

第2時では、ワークシートをもとに発表を行った。本授業から、声に出して相づちをすることを伝えた。声に出すことが難しいC・E・F児には、「相づちスティック」を配布した。C児は声に出して発表することはできなかったが、自分でワークシートを提示することができ、同学年のB児が代読を行った。

しかし、振り返りで「自分の意見を伝えたときの気持ち」に丸をつける際、C児は低い評価をした。理由を尋ねると、「一人で発表したかった」と話した。友達の代読では満足できなかったようだ。自分の意見をしっかり伝えたいという気持ちが高まっていることが感じられた。

(5) 国語科「くわしく きこう」(1年教材/1月実施)

本教材では、おすすめの本を紹介しあう活動を通して、自分の思いや考えを伝え合う楽しさや、「もっと知りたいこと」を見つけ、登場人物や出来事について質問したり、相手の発言に反応したりすることをねらいとした。

① 思いを伝える段階の実践(第1時)

一年生は『ライオンとネズミ』を紹介し、発表を聞いたD児は「どうやって助けたのか」、B児は「どうして助ける関係になったのか」と核心に迫る質問をした。児童が「もっと知りたい」という思いをもって聞いていたことがうかがえた。

C児は時間をかけて悩みながらも「へえ～そうなんだ」のスティックに指で触れて示した。言葉で表現できないが、自分の思いをなんとか相手に伝えようとする姿が見られた。

2年生以上の四人は『雪の結晶ノート』を紹介し、C児は本を手で持って提示する役割を担当した。1年生のG児が「きれいな結晶にはどんなものがありますか」と質問すると、C児はB児と協力して本のページをめくり写真を示した。具体物を用いて答えることができ、伝え合う手立てとなった。振り返りでも中間点に丸を付けた。



【資料7】本を紹介するC児

(6) 国語科「なかよしの一年間をつたえよう～いいこといっぱい、一年生～」(1年教材/3月実施)

本教材は、絵や写真などの視覚的資料を手がかりに、この一年間でどのような「いいこと」があったかを話し合い、新1年生に伝えたい出来事を選んで理由とともに友達に伝えることができることをねらいとした。また、児童の言語表出をより豊かにするための新たな手だてとして、「ことばのたからばこ」(資料8)を取り入れた。



【資料8】電子黒板にうつした「ことばのたからばこ」

① 思いをもつ段階の実践

過去の絵日記を一冊につづって渡し参照させた。決めかねていたC児は担任と振り返り「教育展の見学」を選び指差した。気持ちを表す場面で「ことばのたからばこ」を提示すると、A児は「どきどき」、E児は「たのしい」を選んだ。行事選びに悩んだC児は、休み時間に黒板の下の小中交流会の写真の下にうずくまっていたことから意志を確認し、「小中交流会」について記入できた。

② 思いを伝える段階の実践

黒板に定型文(「ぼくは、〇〇で、～したことを伝えたいです。なぜかという、～だからです。」)を提示したことで自信をもって発表できた。C児は意見シートを見せることを拒んだが、他児の発表に「へえ」「へえ、そうなんだ」のスティックを自ら選んで提示できた。(資料9)

これらの取り組みを経て、C児も次時には一年生に伝えるための紹介文を書き上げることができた。



【資料9】「相づちスティック」を自ら選んで提示するC児

4 研究の成果と課題

(1) 仮説1の手立てに関する検証

ア 継続的な場の設定

自分の思いや考えを伝えたり、聞いたりする活動を継続的に設定したことで児童が学習の見通しをもち、安心して参加できる環境が作られ、C児の変容に繋がった。

イ 挿し絵・写真・実物の提示／「選択シート」／「ことばのたからばこ」の活用

視覚的資料は思考の手助けとなり、主体的な題材選択に有効であった。「選択シート」により意思決定を確実に支援できた。「ことばのたからばこ」は気持ちを表す言葉を考えるきっかけとなったが、語彙の広がりに向け改善が必要である。

(2) 仮説2の手だてに関する検証

ア 話し方や聞き方の支援

「話し方・聞き方名人」「ふわふわあいづち」の毎時間確認により好ましい話し合い方を意識づけてきた。他児に批判的になりがちだったA児・B児が共感を示す場面も増えた。「相づちスティック」は言語表現が難しい児童の有効な発信手段となり、視覚的に「なるほど」「へえ～」といった反応が得られることで、話し手にも受け止められる安心感と会話の楽しさをもたらした。

(3) 抽出児童(C児)の変容についての考察

振り返りシートの記述結果より、「自分の考えを伝えたときの気持ち」(資料10)は10月「わからない」→12月「○と△の間」→3月「◎と○の間」と向上した。実践初期は、発表の順番が来ても首を振り、他者の発表に対しても反応がなく、自分の思いを伝えることに拒否感があった。継続的支援とスティック活用により「届く心地よさ・受け入れられる安心感」を実感できたと考える。

「伝えることができたか」(資料11)は10月「できた」→12月「中間」→1月「中間」→3月「できなかった」と低下した。

これは代読での満足から「一人で発表したかった」という自覚と伝えたい思いが高まったと考えられる。

(4) 今後の課題

「自分で伝えたい」という意欲「高まった反面、言葉による思いの表出には至らなかった。今後は、録音音声(タブレット)の活用、一言だけの発語など、非言語から自力発語へと段階的支援を工夫していく必要がある。

	11月実践	12月実践	1月実践	3月実践
◎ 	2	3	2	2
○ 	4	2	3	2
△ 	0	0	0	0
その他	1	1	1	1
合計(参加人数)	7	6	6	5
割合	29%	50%	33%	40%
C児の回答	わからない	○と△の間	○と△の間	◎と○の間

【資料10】振り返りシート記述結果 自分の考えを友達に伝えたときの気持ち

	10月実践	12月実践	1月実践	3月実践
できた	7	5	5	4
できなかった	0	0	0	1
その他	0	1	1	0
合計(参加人数)	7	6	6	5
できたの割合	100%	83%	83%	80%
C児の回答	できた	中間	中間	できなかった

【資料11】振り返りシート記述結果 自分の考えを伝えることができたか